大阪歴史博物館

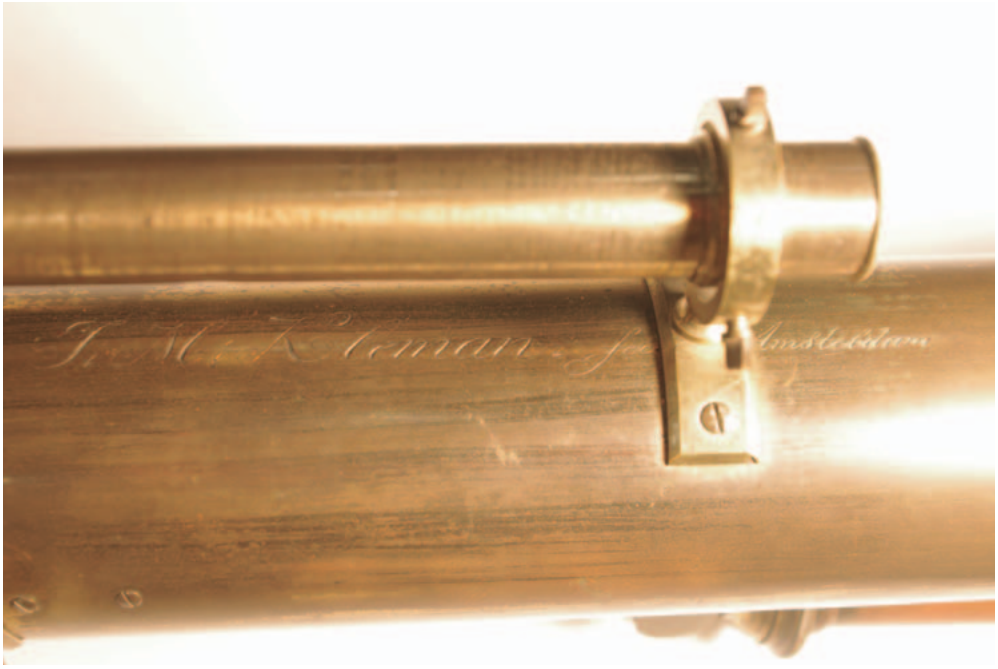
館蔵資料集13

羽間文庫：器具篇―付、重要文化財指定品目録―

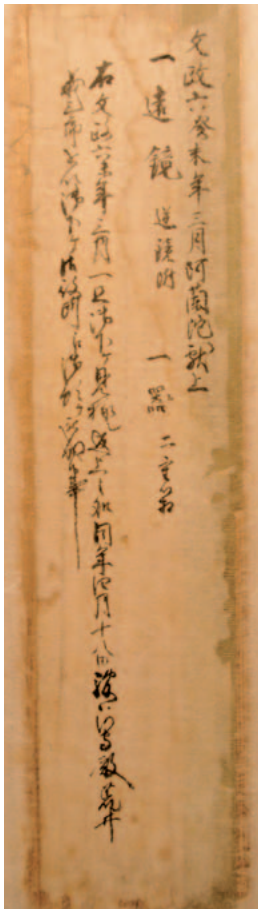
大阪歴史博物館

屈折式望遠鏡　1具　19世紀　重文

オランダ製の望遠鏡。対物レンズの有効口径は3.7㎝。アイピースを交換することにより、正立像の地上用望遠鏡にも、倒立像の天体用望遠鏡にも使用可能。ファインダーの倍率は5倍たらず。文政6年(1823)に、オランダから幕府に献上されたもので、後に間重富の子・重新に貸し下げられた。



J.M.Kleman fe[cit?]Amsterdam



外箱書付

内箱

ラクダから望遠鏡へ
―オランダから幕府への屈折式望遠鏡献上―

平岡　隆二

羽間文庫の屈折式望遠鏡【写真：4～5頁】が、文政六年（一八二三）にオランダから幕府に献上されたものであることは早くから知られていたが、いったい誰が何のために献上したのかはこれまで不明であった。今回、羽間文庫研究会での合同調査をきっかけに、オランダ側の史料にあたってみたところ、その献上の詳しい背景のみならず、同じ年に大坂に到来した2頭のラクダ（図7頁）との意外な関係も明らかになった。以下その顛末について紹介したい。

まず本器の製作者についてまとめると、鏡筒に付された陰刻の銘は「J.M.Kleman fecit Amsterdam（J・M・クレマン製、アムステルダム）」と読むことができ、オランダの科学機器製作者ヤン・マルテン・クレマン（Jan Marten Kleman、一七五九－一八四五）の製作と判明する。オランダ王立科学院の伝記によると、クレマンは一七八一年にアムステルダムで数学、光学、物理学、航海術、天文学に関わる機器の製作をはじめた。一八〇一年に彼の評判はあがり、模造品もつくられるようになったため、自らが製作した機器には銘を入れるようになった。すなわち本器も、その頃から長崎に到着した一八二二年（後述）以前の製作と推定される。一八〇八年には王立ネーデルラント海軍の機器製作者に任命され、さらにその翌年にはアムステルダムで開かれた産業博覧会で金賞を受賞し、彼の会社は「王室のKoninklijk」という称号を獲得した。クレマンと彼の会社は、当時のオランダを代表する科学機器メーカーの1つだったと言えよう。

さて本器の外箱蓋裏には、その幕府献上について記した文書【写真：5頁下「外箱書付」】が貼付されており貴重である。全文を翻刻すると「文政六癸未年三月　阿蘭陀献上／一　遠鏡　逆鏡附　一器　二重箱／右文政六未年三月一旦御下ケ見様シ返上之処同年四月十八日駿河守殿荒井／義三郎を以御下ケ御役所江御預ケ被成候事」（／は改行）。すなわち本器は、文政六年三月にオランダが幕府に献上したあと、同年四月一八日に若年寄・植村駿河守家長から下げ渡されて天文方預かりとなった。そして正確な時期は不明ながら、それが当時大坂で御用測量にあたった間重新に貸し下げられたと推定される。

ではその献上は誰がどのような目的で行ったものだったのか。結論から述べると、本器は当時の出島オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff、一七七九－一八五三）が将軍徳川家斉に贈った献上品の1つで、しかもそれは、将軍に献上するため一年前に輸入済みだったラクダの受け取りが突然謝絶されたことにより、急きょその代わりに仕立てられたものだった。

日本商館の責任者たるブロムホフに課せられた最重要任務は、当時の幕府の方針により減額を強いられていた日本銅の輸出を可能な限り増額させて貿易収支を改善し、対日貿易を再興することだった。幕府関係者への働きかけが功を奏し、彼はまず文政三年（一八二〇）から向こう三年間にわたって毎年一一〇万斤の銅輸出許可を得るという大幅な増額に成功し、また文政五年（一八二二）の江戸参府では、さらに三年間の延長許可までとりつけていた。文政四年七月に将軍への献上品として出島に到着していたアラビア産のラクダ2頭は、そうした交渉を有利に進めるため、オランダの関係筋に「毎年それを強く催促し、多くの苦労をして入手」（『長崎オランダ商館日記』一八二二年七月九日条）したものだった。それは将軍に献上する贈物ではあったが、将軍や幕閣の歓心を買い、交渉を有利に進めるための取引カードでもあったのだ。

ところが事態は思わぬ方向に進んだ。阿蘭陀通詞が出島まで伝えにきたところによると「ラクダたちは多くの理由から江戸に送る必要はなく、謝絶され、そしてそれを長崎で売ってもよい、という江戸からの命令が届いた」（『日記』同上）というのである。驚愕したブロムホフは日記で不満と怒りをあらわにしている。曰く、苦労の末に取り寄せたラクダは、もう何年も前に注文されたもので、幕府はすでに受納許可まで出しており、そのため多額の費用をかけて一年間出島で飼育し江戸に送る日を待っていたというのに、それらすべてを突然反故にするという「無礼なやり口はいまだかつて見たこともない」と。幕府の翻意の真相がいずこにあったかは史料が得られず不明であるが、ブロムホフの怒りはもっともで、通詞も「確かにまったく無礼な話だ」と同意するしかなかった。ともあれ彼らは、江戸から来たこの種の命令を覆すことは不可能であることをよく知っていた。すぐにラクダは長崎で売却し、次の船から代わりに別の献上品を仕立てるという方針で同意した。そして「何の困難も起こさないために、そして可能な限り早くことを済ませるために」、新たに献上品に選ばれたのが「町年寄テキゼロー［久松碩次郎。筆者注］のために届いた望遠鏡と、脇荷で仕入れた一〇枚の盆」（『日記』同年一〇月一一日条）だった。町年寄は長崎地役人の最高位として権

力や財力には絶大なものがあり、将軍への献上に耐えうる望遠鏡を注文していたとしても不思議ではない。そもそも元の注文自体、科学的な関心からではなく、大名や有力商人に高く転売するためだった可能性が高い。こうして町年寄の望遠鏡に、ラクダの代役として白羽の矢が立てられたのである。

しかしブロムホフの苦悩はこれで終わらなかった。ラクダの売却には多くの日本人の関与を必要としたが、彼らもまたその取引で一儲けしようとしたのである。日記では「私［ブロムホフ］はラクダのことでこれを儲かるやり方で厄介払いをするため、依然として絶え間なく忙殺されている。話は一番に町年寄の強欲のせいで進まないが［中略］通詞もご同様である」（『日記』同年一二月二九日条）と嘆き節である。最終的に2頭のラクダは五七ギルダー六〇ストイフェルで売りに出され、文政六年二月九日（一八二三年三月二一日）に長崎商人の富山屋文右衛門に引き渡された。ちなみにほぼ同時期に出島に滞在したシーボルトは、三六〇〇ギルダーの年棒のほかに、日本の動植物などを収集・研究するための経費として年間八〇〇〇ギルダーの予算をオランダ側から与えられており、たとえば日本のシカは当時五〇～六〇タエル（八〇～九六ギルダー。1タエル＝1・6ギルダー換算）、珍しい小鳥一羽は一五～五〇タエル（二四～八〇ギルダー）だったと報告している。シーボルトはそれらがとびきり高価だと嘆いているが、それにしてもアラビアからはるばる運んだラクダ2頭が、日本のシカや小鳥よりも安かったことには驚きを禁じ得ない。その程度の元値で売りに出さざるを得なかったブロムホフの苦悩が垣間見える。

望遠鏡の方も、将軍への献上物にふさわしいコンディションに整える必要があった。日記には「望遠鏡の箱が研磨と新しいビロードで裏打ちするために町に送られたが、この費用は一〇タエル［一六ギルダー］に達する」（一八二三年一月一五日条）と見えている。現存する望遠鏡の内箱には、内側の全面に緑色のビロード（ベルベット）生地が張られているが、これはそのとき長崎で施されたものだろう。また「壊れていることが判ったねじをひとつ修理するために望遠鏡の脚を町へ持っていった」（同月一八日条）とも見え、細部にまで気が配られていたようだ。

すべての準備を終えた望遠鏡は、商館長本人が参府しない年の通例にしたがって、献上品を江戸まで輸送する通詞らに託され、長崎を出立した。献上品は文政六年三月一二日（一八二三年四月二二日）に無事江戸に到着し、在府の長崎奉行を通じて滞りなく献上され、まもなく天文方に下げ渡されたことは前掲のとおりである。

通詞らの足取りと前後するかたちで2頭のラクダも東上した。同年七月には最初の本格的な興行として大坂・難波新地で小屋掛けされ「一時都下これを口にせざるもの無し」（『良山堂茶話』）という大ヒットを博した。ラクダはその後も一〇年以上にわたって、京、江戸、名古屋など計三〇か所以上を巡業し、各地で大きな話題を振りまいた。ブロムホフは望遠鏡を献上した文政六年の秋に、六年間の任期を終えて日本を離れたため、その評判を知るすべはなかっただろう。かくして彼が深く関わったオランダ渡りの献上品のうち、将軍に拒絶されたラクダは庶民の大歓迎をうけ、望遠鏡は大坂の天文学者の元に残されたのである。

参考文献

上野英乗「長崎役人分限帳」文政三年辰六月改正（長崎歴史文化博物館収蔵）。
オランダ王立科学院「オランダ科学機器製作者伝」http://www.dwc.knaw.nl/biografie/scientific-instrument-makers/（2017年2月25日取得）。
川添裕『江戸の見世物』（岩波書店、二〇〇〇年）。
栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』（平凡社、二〇〇九年）。
日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』第一〇巻（雄松堂出版、一九九九年）。

図「見世物番付　難波新地野側　紅毛来船ハルシヤ国産駱駝　順意堂・玉屋市兵衛板」（大阪歴史博物館蔵）

大阪歴史博物館 館蔵資料集13　羽間文庫：器具篇―付、重要文化財指定品目録―

編集・発行＝大阪歴史博物館

発行日＝平成29年 3 月31日

印刷・製本＝丸山印刷株式会社

Ⓒ大阪歴史博物館 2017